

# 宮城県賀籠沢遺跡 2005 年度発掘調査の成果

東北学院大学佐川ゼミナール  
(佐川正敏・鈴木 雅・安倍奈々子)

## I. 2005 年度発掘調査要項

遺跡名	賀籠沢(かござわ)遺跡(宮城県遺跡登録番号:7148)
所在地	宮城県柴田郡村田町大字小泉字賀籠沢
調査期間	2005年7月31日~8月12日(13日間)
調査面積	約42㎡(うち10㎡は2004年度より継続調査)
調査主体	佐川正敏(東北学院大学文学部教授)
調査参加	東北学院大学大学院文学研究科・文学部歴史学科佐川ゼミナール
調査協力	宮城県柴田郡村田町教育委員会・村田町歴史みらい館・石黒伸一郎・藤原二郎・高橋健寿・長友恒人・下岡順直・佐藤正隆・菊田行衛(敬称略)
賀籠沢遺跡発掘調査ホームページ	<a href="http://kagozawa.arcpot.com/">http://kagozawa.arcpot.com/</a>

## II. 遺跡の概要

賀籠沢遺跡は、宮城県仙台市の中心部から南西約20km、山形県境の蔵王山から東に約20kmの宮城県柴田郡村田町に位置する(図1)。村田町は地形的には蔵王山から東に延びる丘陵地帯と、県南部を南北に延びる高館丘陵とに挟まれ、村田盆地を形成している。本遺跡はその東縁を南流する白石川支流の新川が開析した高館丘陵の西麓に立地する。

本遺跡は1990年に発見され、藤原二郎氏と高橋健寿氏によってこれまでに約1,500点の石器が採集されている。採集された石器は、主として玉髓を素材とする多量の剥片・チップ類のほか石核、石刃核、石刃と少数のナイフ形石器、スクレイパーなどであり、器種組成と製作技術から後期旧石器時代のものと推定される。また、遺跡の立地する高館丘陵の基盤である上部中新統白沢層の軽石質凝灰岩層中には珪化木・瑪瑙・玉髓系石材(以下、玉髓と総称)が豊富に埋蔵されており(田村1986)、本遺跡はこれらの原産地において石器製作を行った原産地遺跡としての性格が考えられる(図1)。1993年に東北歴史資料館が賀籠沢遺跡と山入A遺跡で行なった小規模な確認調査では、黄褐色粘土層から多数の剥片・チップ、石核のほか、エンドスクレイパー、彫刻刀形石器がわずかに出土している(東歴1994)。

このような後期旧石器時代の玉髓原産地遺跡は、本遺跡のほかに周辺で一子沢遺跡、山入A遺跡、百々目木遺跡、梨木沢A遺跡などが確認され、新川流域を中心とする東西約1.5km、南北約4kmの範囲に新川流域遺跡群を形成している(大場2004)。

## III. 調査に至る経緯

本遺跡は新川流域遺跡群における遺跡分布の中心部にあり、まとまった採集資料が得られている。本遺跡は新川東岸に位置し、新川に向かって東から西に張り出す痩せ尾根状の丘陵の

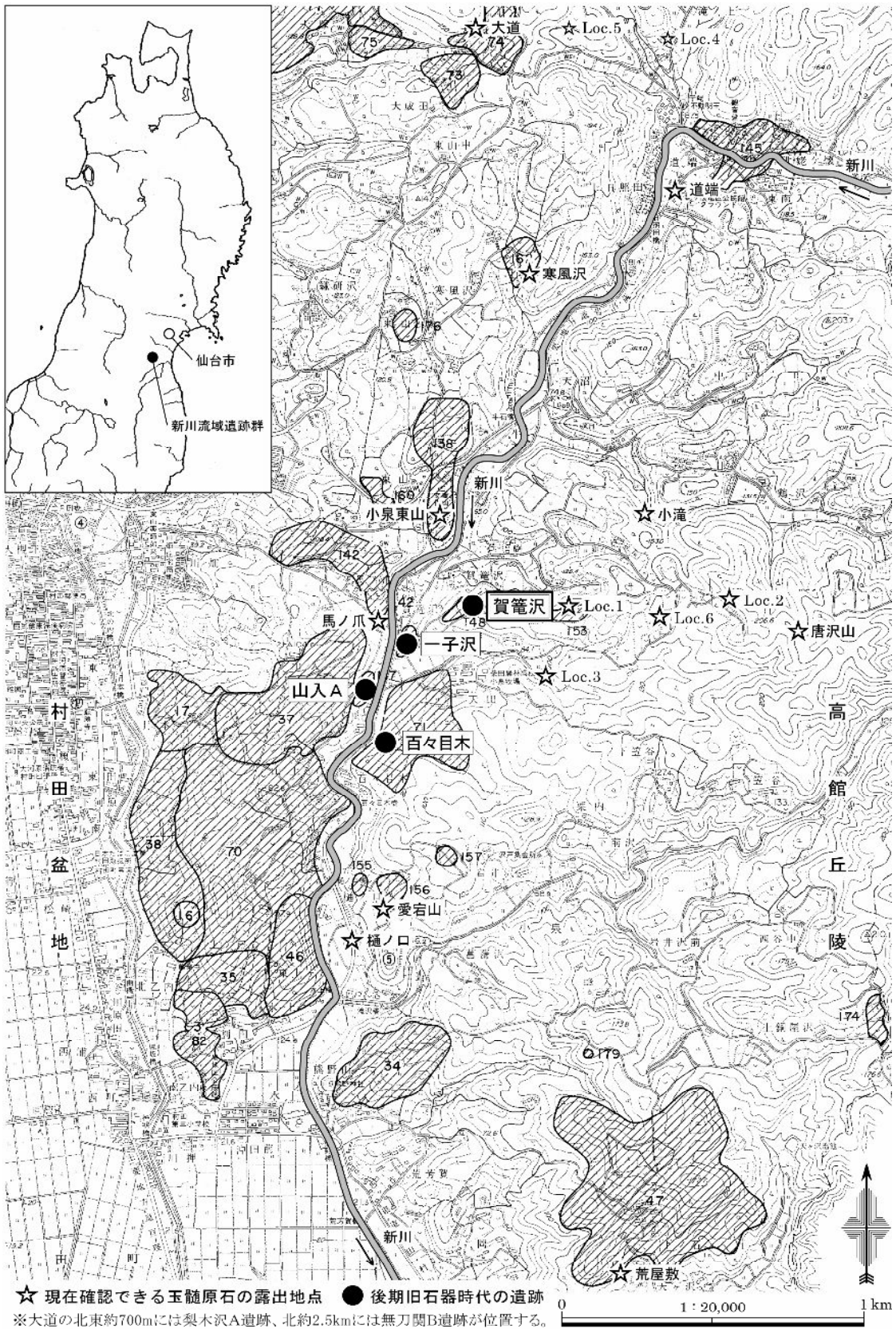


図1 賀籠沢遺跡と新川流域の後期旧石器時代遺跡 (村田町教委 1995『村田町遺跡地図』に加筆して作成)

先端部に立地する。本遺跡の西側地区は 1990 年頃の造成によって削平されたが、この際に多量の石器が採集され、遺跡発見の契機となった(図 2)。また、削平によって形成された東側地区との法面から黒曜石製のナイフ形石器などが断面採集された。

東北学院大学文学部歴史学科(2005 年 4 月に史学科から改組・名称変更)佐川ゼミナールでは、後世の削平の影響が少なく、地層が良好に保存されていると予想される東側地区を対象に、2003 年度より考古学実習の一環として賀籠沢遺跡の性格解明を目的とした学術発掘調査を行ってきた(佐川・大場 2003、佐川ゼミナール 2004)。

## IV. 調査の経過

### 1. 基本層序

発掘調査で確認された本遺跡の基本層序は、1 層：表土、2 層：暗褐色腐植土(近代の耕作土)、3 層：黄褐色粘土、4 層：粘土ブロック混じり黄褐色粘土、5 層：粘土ブロック混じり明褐色粘土、6 層：褐色粘土(いわゆる暗色帯か)、7 層：風化スコリア混じり褐色粘土、8 層：川崎スコリア(Za-Kw;2.6~3.1 万年前、板垣ほか 1981)、9 層：褐色砂質粘土、10 層：明褐色砂質粘土、11 層：愛島軽石(Ac-Md;5~8 万年前、市川 1986、輿水 1986、佐藤 1986)、12 層：黄褐色砂質粘土、13 層：明褐色砂質粘土、14 層：黄褐色砂質粘土となる。深掘区では現地表面から約 3m 掘り下げたが、基盤には到達していない。2 層では近代の耕作土に混じって弥生時代の土器が出土しており、本来は 3 層より上位に弥生時代の遺物包含層が存在した可能性がある。3 層では縄文時代早期後葉の梨木畑式(相原 1990)に比定される縄文条痕土器が出土し、後期旧石器時代の石器は 4 層を中心に 3 層下部から 5 層上部にかけて出土している。

### 2. 2003 年度の発掘調査

①東側地区における石器の分布状況と出土層位の確認、②石器群の年代確定(火山灰層の検出と理化学的年代測定の実施)を主な目的として、3×3mの調査区 3 か所(G-15、I-14、L-15)と層序確認用の深掘区 1 か所(P-13)などを設定して発掘調査を行なった。

この結果、東歴確認調査区の東側約 3mの地点に設定した L-15 で石器の出土を確認した(石器ブロック 1)。出土した石器はナイフ形石器 1 点、ピエスエスキュー 1 点、石刃核 4 点、石核 2 点、石刃 1 点、剥片・チップ 21 点で、すべて玉髓を素材とする。ナイフ形石器は良質な玉髓製の石刃を素材とする二側縁加工で、茂呂型ナイフ形石器の範疇に入ると考えられる。

また、石器の主たる包含層は 4 層であることが確認された。出土層位と製作技術などから、出土した石器はすべて後期旧石器時代のものと考えられる。なお、表土層および 2 層からも石器が出土しているが、これらの表面には黄褐色土が付着していることから、本来隣接する西側地区の 4 層に包含されていたものが、造成以後に耕作等に伴って投棄されたものと推定される。

### 3. 2004 年度の発掘調査

①L-15 と東歴確認調査区の間 2×5m の調査区(K・L-16)を設定し、石器ブロック 1 の

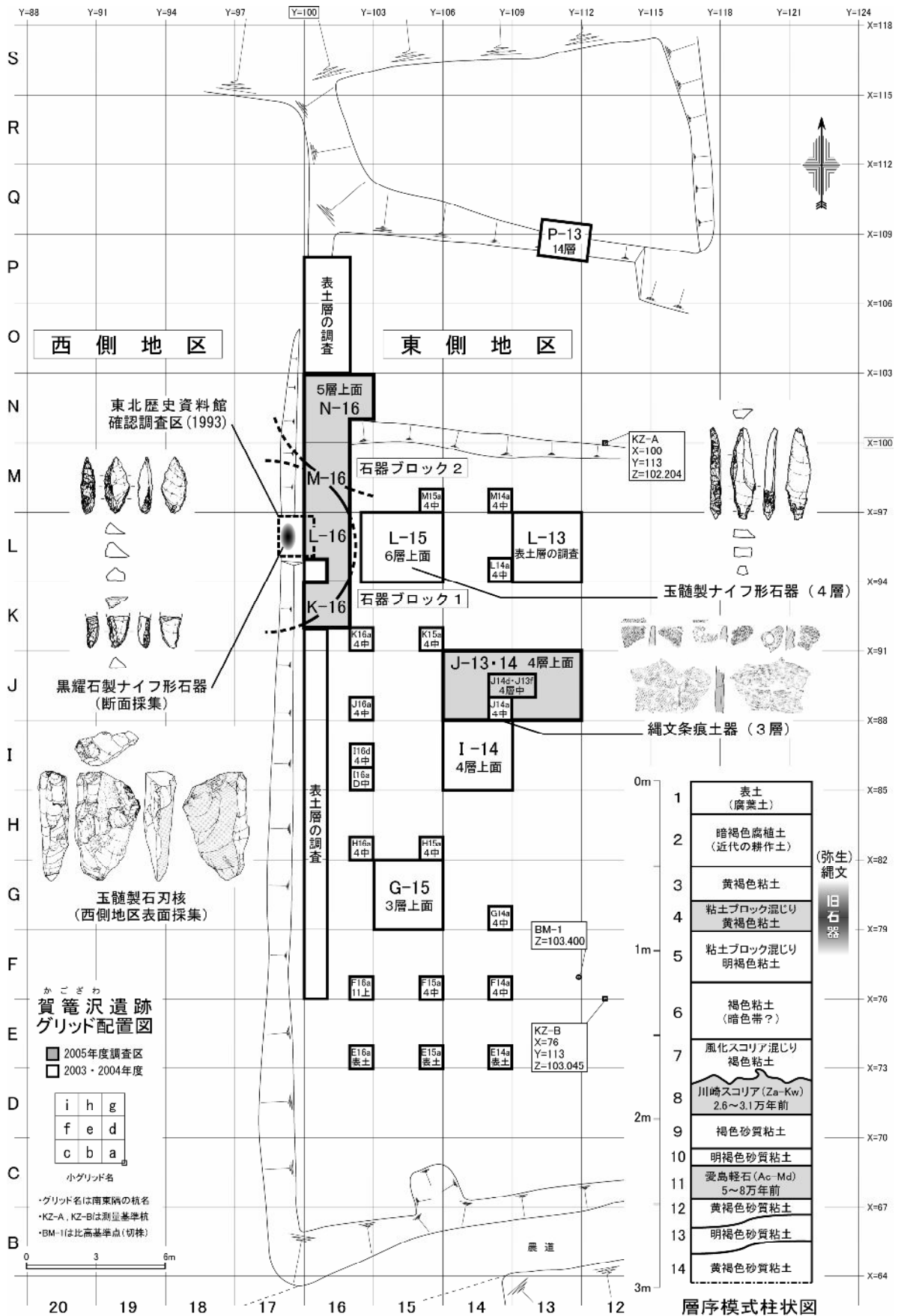


図2 調査区の配置と調査到達層位・基本層序

広がりを確認すること、②東側地区一帯に3mおきに1×1mの試掘調査区17か所を設定して、石器分布の広がりを確認すること、③西側地区との境に南北方向の表土層を対象とする調査区を設定して、西側地区から投棄された石器の分布範囲を確認することにより、西側地区に本来存在した石器ブロックの大まかな位置と規模を推定する材料を得ることの3点を主な目的として発掘調査を行なった。

この結果、K・L-16で石器の出土が確認され、2003年度にナイフ形石器などが出土したL-15と東歴確認調査区とが一連の石器分布（石器ブロック1）を形成していたことが分かった。17か所の試掘調査区では石器の分布は確認されず、東側地区における石器分布は北西寄りの一帯に限定的であることが判明した。また、表土層の調査では、西側地区から投棄されたと推定される石器が、現在までに4層で検出している石器ブロック1と重複ないしは隣接する範囲に認められた。このことは、これまでに採集された資料を含め、西側地区にかつて存在した石器ブロックと、発掘調査で検出している石器ブロック1が一連の分布を形成していたことを示唆しているものと考えられる。なお、試掘調査区H-15aの3層上面で弥生土器片と磨石を含む土坑を確認し、J-14aでは3層下部から縄文条痕土器がややまとまって出土した。

## V. 2005年度の発掘調査

### 1. 調査目的と調査区配置

①昨年度までに発掘調査で確認した3～5層における石器の分布状況と、表土層における西側地区から投棄されたと推定される石器の分布状況を加味して3×6mの調査区（M・N-16）を設定し、石器ブロック1の未発掘部分を完掘すること、②昨年度の調査で4層中まで掘り下げて石器の分布を確認したK・L-16をさらに掘り下げ、4層下部から5層にかけての石器分布と本来の生活面を確認すること、③昨年度の試掘調査で縄文条痕土器がややまとまって出土したJ-14aの周囲に調査区（J-13・14）を設定し、縄文時代早期の遺構の有無を確認することを目的として発掘調査を行なった。

### 2. 調査成果

#### (1)遺物出土状況

本年度の調査において確認された層序は、基本的に昨年度までの見解と同様である。昨年度の調査で4層中まで掘り下げていたK・L-16ではさらに5層上面まで掘り下げ、石器15点（4層下部11点、5層上面4点）が出土した。分布状況は4層上部より散漫となる。昨年度の調査で表土中における石器分布を確認していたM・N-16では5層上面まで掘り下げ、石器311点（1層10点、2層9点、3層69点、4層159点、5層49点、攪乱等15点）が出土した。4層における出土点数が多い。平面分布状況は昨年度の調査区と接する南側（M-16b・c・f）にやや集中し、若干の空白域を挟んで北側（M-16e・h・i、N-16b～i）に濃密な集中がみられた。このうち南側の石器分布は昨年度までに検出している石器ブロック1の分布と連続しており、西側地区に開く半円形の石器分布をほぼ完掘した状態である。この分布は西側地区に存在した

石器ブロックの縁辺部に当たると推定される。これに対して北側の石器分布は濃密であり、新たな石器ブロックを検出していると考えられる（石器ブロック2）。

なお、M・N-16の2層・3層を中心に縄文・弥生土器片249点が出土し、一部は木の根による攪乱などで4層・5層に入り込んでいる状況がみられた。また、近代の耕作による畝跡とみられる溝状の攪乱が観察され、この埋土中から弥生時代のアメリカ式石鏟1点が出土した。

J-13・14では4層上面まで掘り下げ、2層・3層を中心に縄文・弥生土器片172点が出土したが、遺構等は確認されなかった。弥生土器片はJ-14d付近の3層上面にやや集中がみられた。また、J-14dの3層下部で彫刻刀形石器1点が出土したため、J-13f・J-14dの4層を約10～15cm掘り下げたが、石器分布の広がりには確認されなかった。

## (2)出土遺物

本年度の調査では石器348点（1層20点、2層13点、3層74点、4層170点、5層53点、攪乱等18点）、縄文・弥生土器片429点（1層21点、2層152点、3層139点、4層63点、5層4点、攪乱等9点）が出土した。石器は4層を中心に出土し、攪乱層より出土した弥生時代のアメリカ式石鏟1点（珪質頁岩製）を除いては、ほとんどが後期旧石器時代のものと考えられる。2層・3層を中心に出土した土器片は縄文時代のものが主体的であり、縄文条痕土器が含まれている。弥生土器の一部には接合して器形が復元されるものもある。

後期旧石器の器種組成は彫刻刀形石器、エンドスクレイパー、スクレイパー、ピエスエスキューが各1点、二次加工ある剥片6点、微細剥離ある剥片6点、彫刻刀スポール1点、石核8点、石刃核ブランク2点、石刃核5点、打面再生剥片1点、稜付石刃11点、石刃29点、剥片・チップ268点、分割礫、原石が各1点である。ツールは少数で、石刃剥離に関連する石核と剥片類が主体を占める。これらの石材組成は、玉髓326点、凝灰岩(玉髓表皮)5点、黒色頁岩3点、青灰色流紋岩2点、黒色流紋岩2点、安山岩2点、珪質頁岩1点、珪質細粒凝灰岩1点、黒耀石1点であり、玉髓が圧倒的多数を占めている。

石刃核(図5-2、図6-2)はいずれも玉髓製で、板状の大形剥片ないしは分割礫を素材としている。木口面に作業面を設定する単設打面石核で、稜調整、打面調整がみられる。エンドスクレイパー(図4-6)とスクレイパー、ピエスエスキューは玉髓製の剥片を素材とする。彫刻刀形石器(図4-7)は黒色頁岩を素材とし、背面側に彫刻刀面を作出している。エンドスクレイパーの刃部と彫刻刀形石器の先端部縁辺には、使用によるとみられる磨耗が観察される。黒耀石は約2cm大の小亜円礫で、原石として持ち込まれたものの一部であろう。

## (3)年代測定

本遺跡の石器群の年代確定のため、2003・2004年度の発掘調査において奈良教育大学教授の長友恒人氏および奈良大学大学院(現在:奈良女子大学共生科学研究センター)の下岡順直氏により理化学的年代測定のための土層サンプリングならびに検定棒の埋設が行なわれ、このほどIRSL年代(いわゆる暫定値)が以下のように示された。

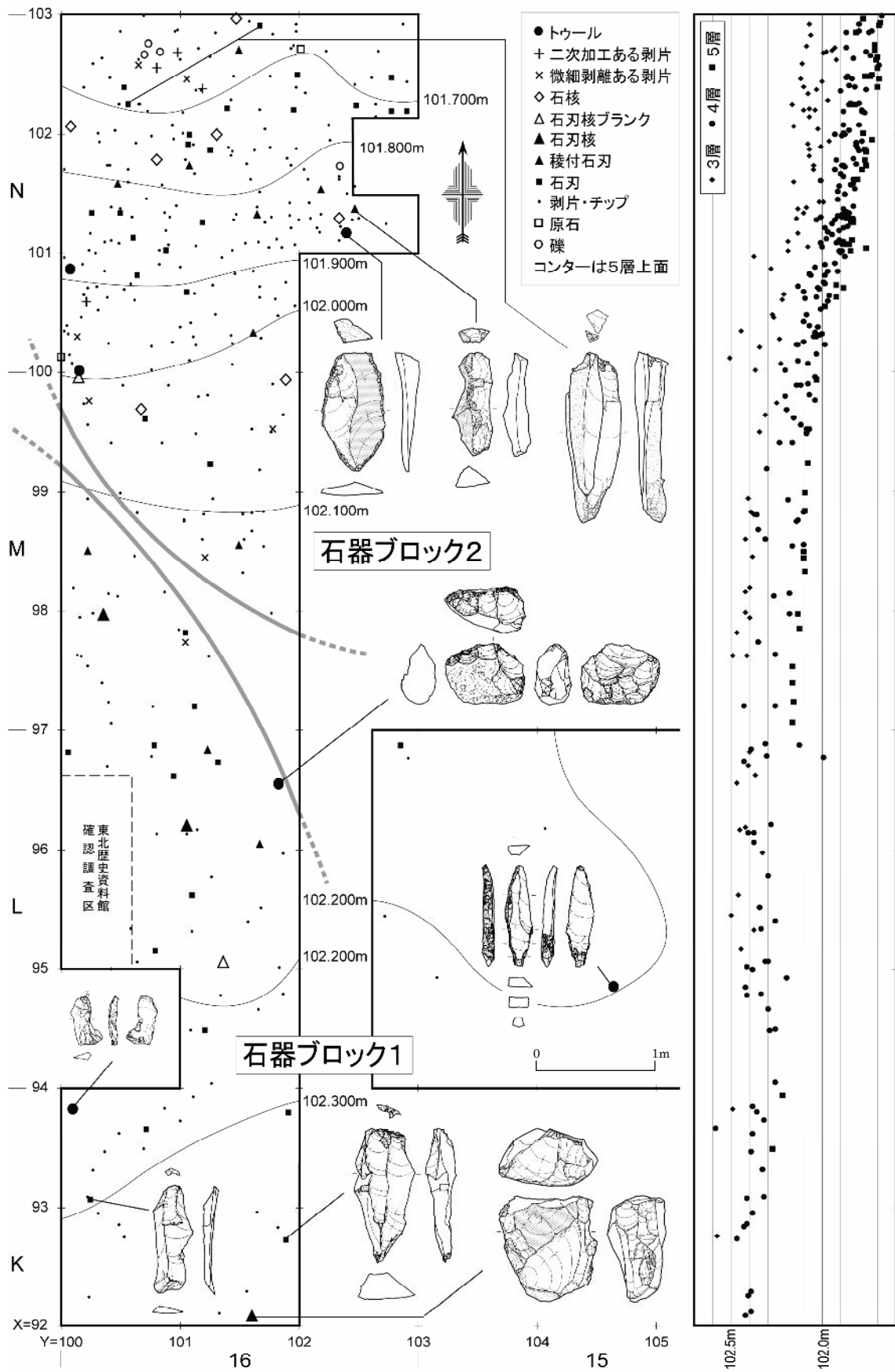


図3 旧石器の平面・垂直分布状況（石器は縮尺不同）

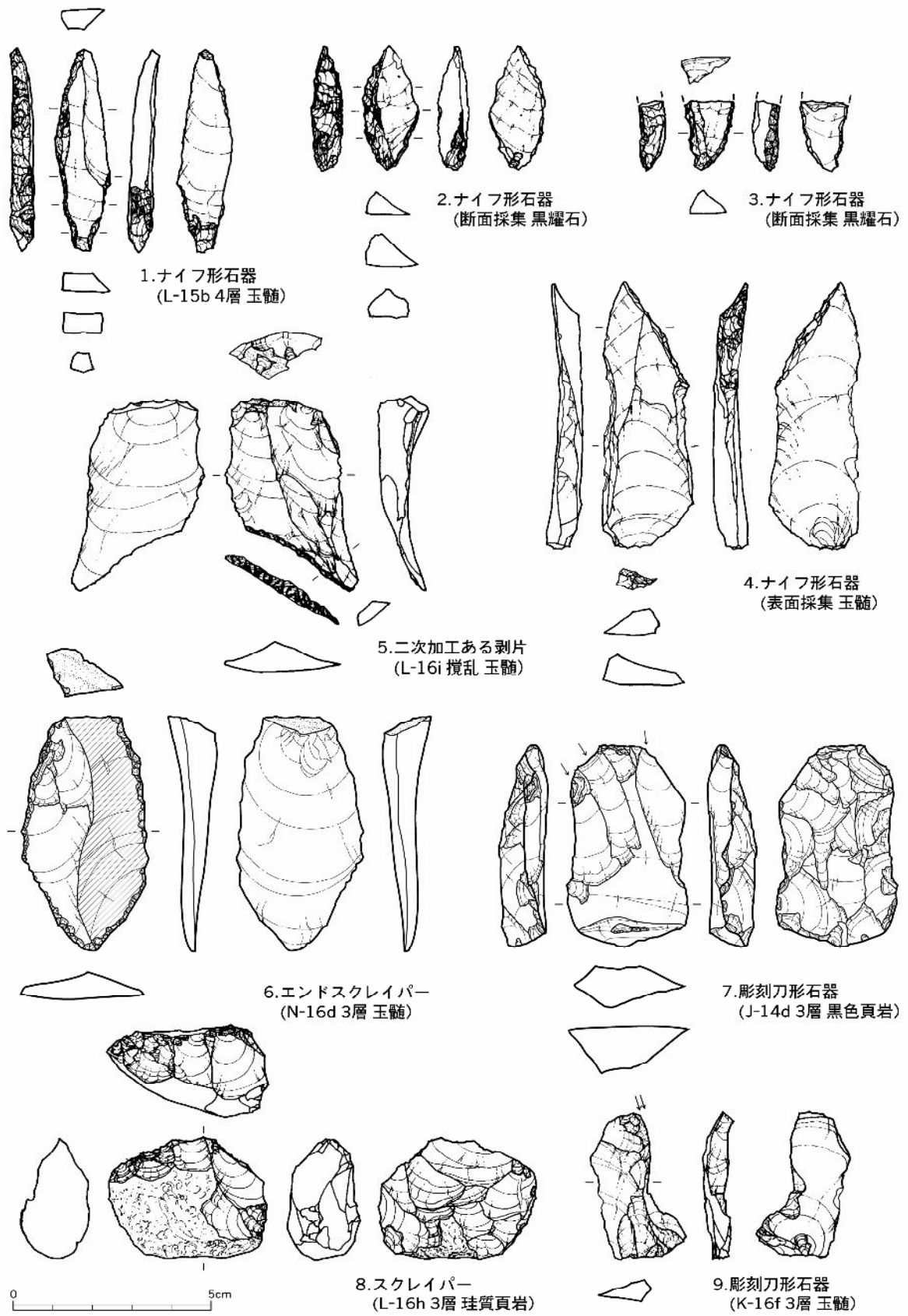


図4 出土遺物(1)

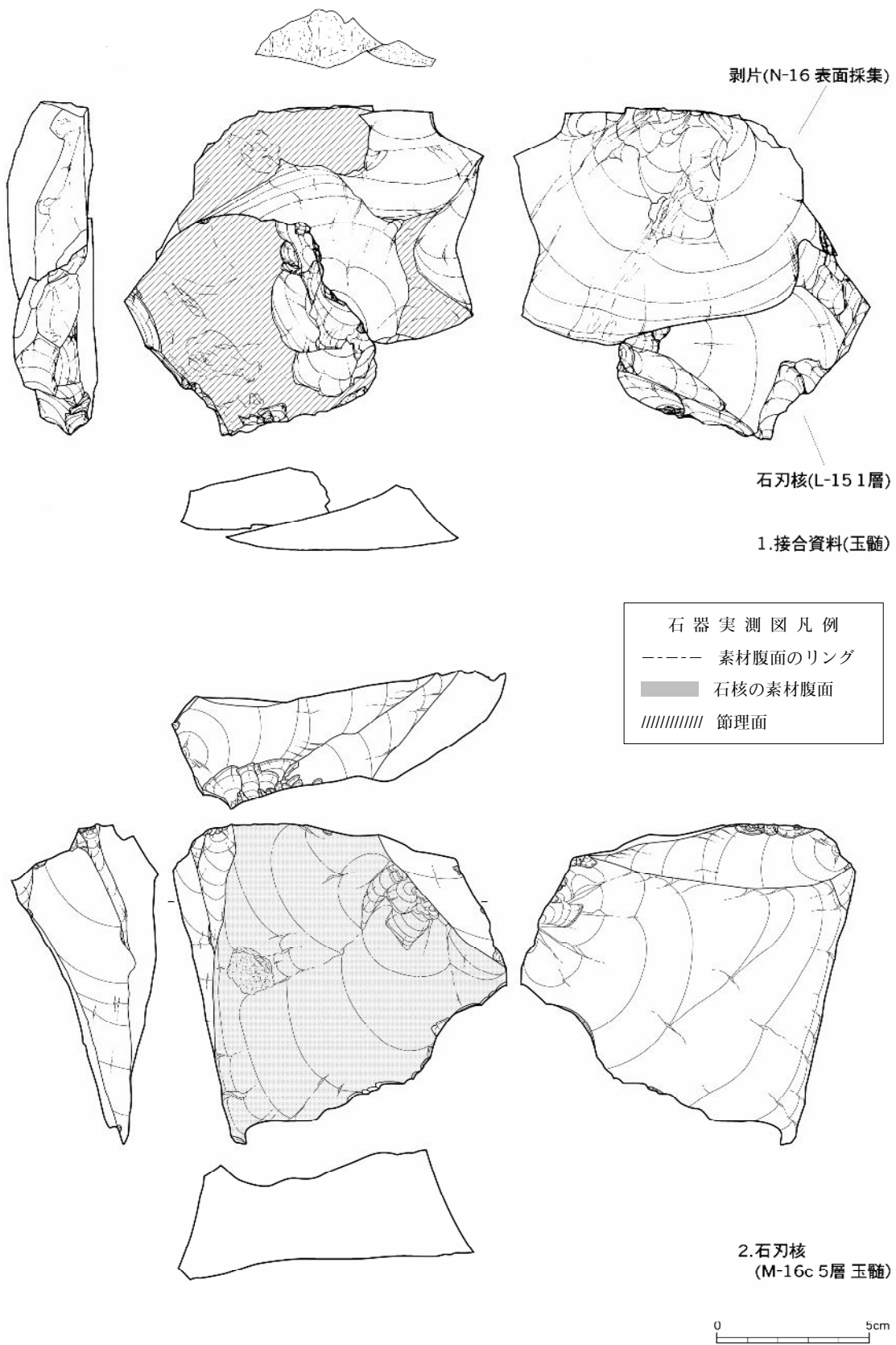
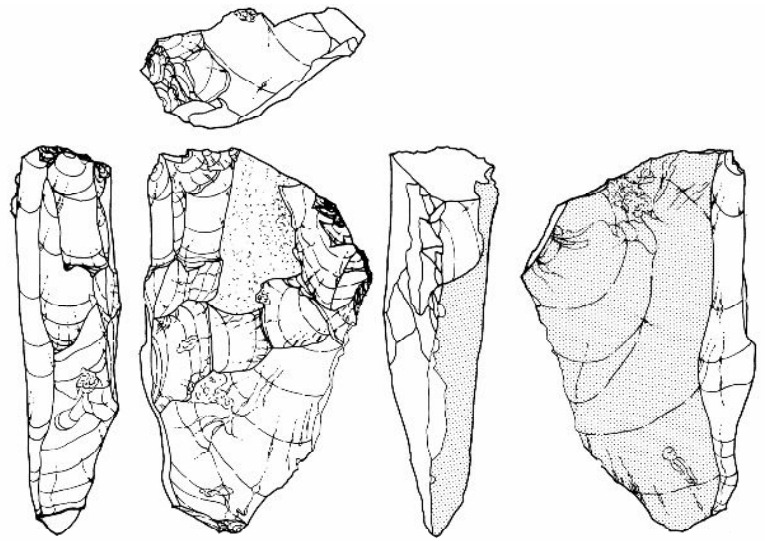
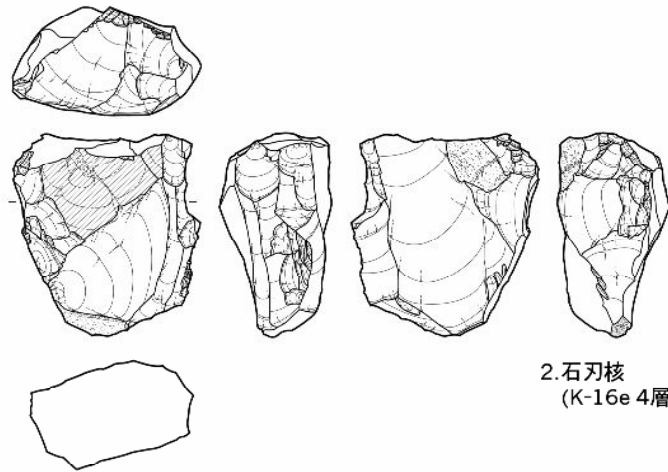


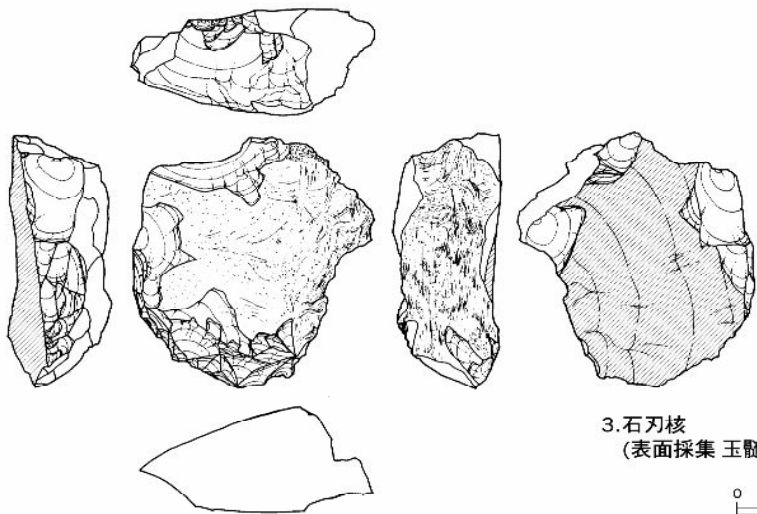
図5 出土遺物(2)



1.石刃核  
(表面採集 玉髓)



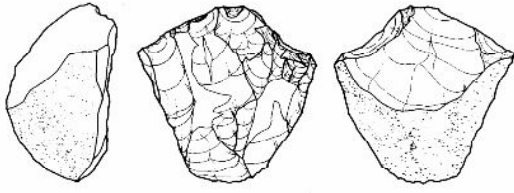
2.石刃核  
(K-16e 4層 玉髓)



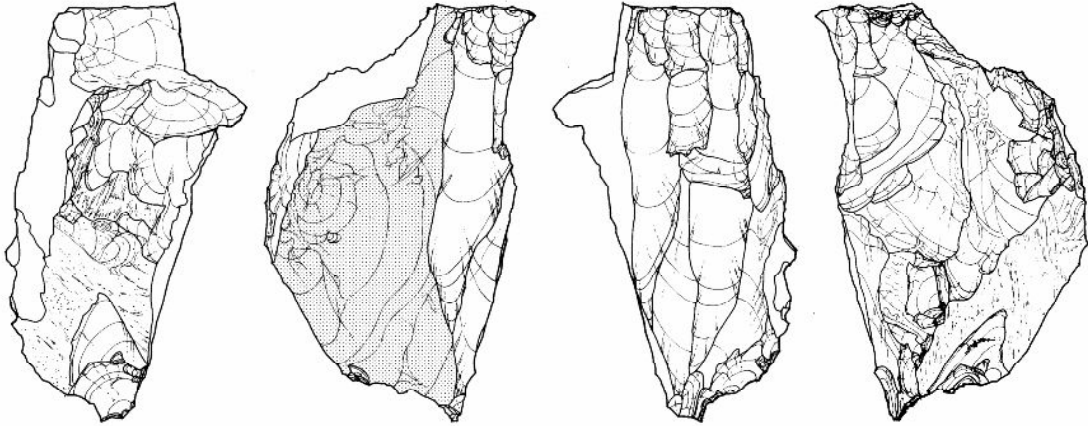
3.石刃核  
(表面採集 玉髓)



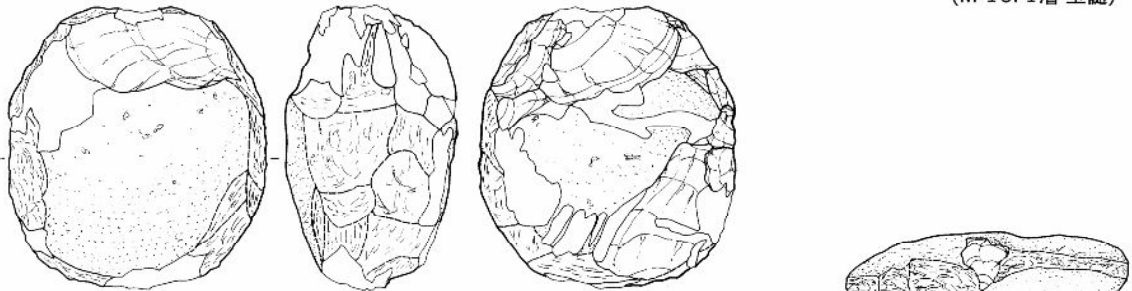
图6 出土遺物 (3)



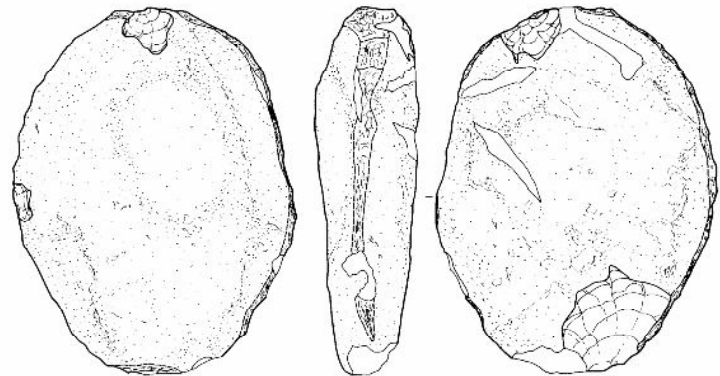
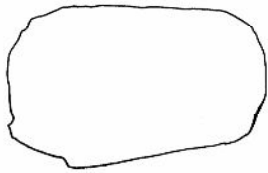
1. 石刃核  
(表面採集 玉髓)



2. 石刃核  
(M-16f 1層 玉髓)



3. ハンマーストーン  
(K-16 2層 粗粒安山岩)



4. ハンマーストーン  
(K-16a 1層 粗粒安山岩)

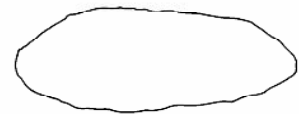


図7 出土遺物(4)

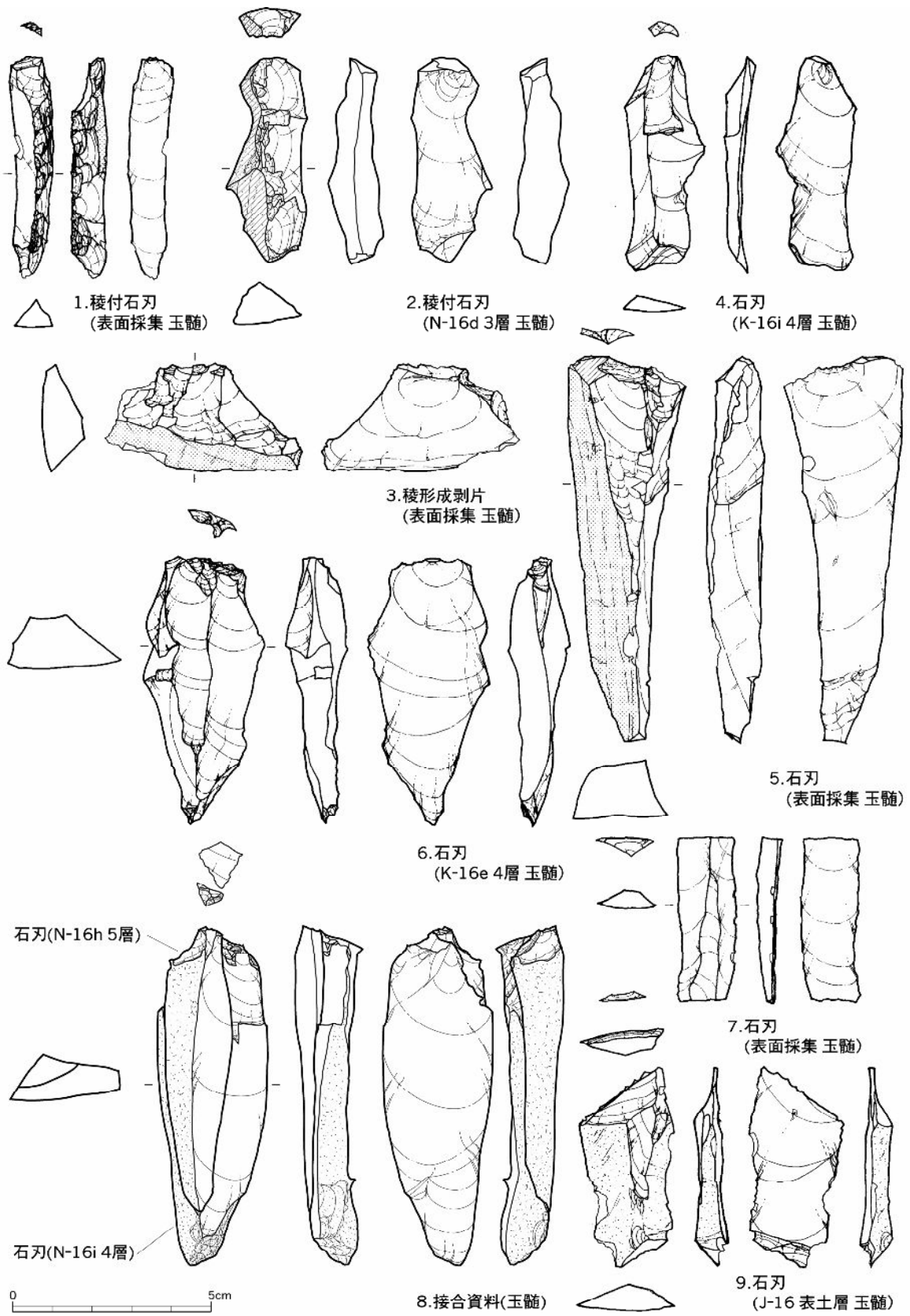


图8 出土遺物 (5)

3層:9,200±2,200年前、4層:14,000±3,100年前、5層:14,300±2,100年前、6層:15,700±1,900年前、8層(川崎スコリア):29,000±7,300年前(3・4・5層はL-15採取試料、6層はF-16a採取試料から求めたIRSL年代。川崎スコリアの年代は、L-15採取試料に仙台市山田上ノ台遺跡採取試料と川崎町荒羽賀露頭採取試料から求めた数値年代を加重平均した値である)。

## VI. まとめと展望 —新川流域遺跡群をめぐる後期旧石器時代の遊動生活—

本遺跡の西側地区が1990年頃に削平されて石器が露出した際、直径数mのまとまりが3か所で確認されたという(高橋健寿氏の証言による)。このうち最も規模が大きく、東寄りに位置したというまとまりは、発掘調査で東側地区のK・L・M-16、L-15から検出している石器ブロック1と接しており、同一の石器ブロックを形成していた可能性が高い。さらにN-16において今回新たに検出した濃密な石器集中部は、石器ブロック1との間に若干の空白域を挟んでおり、これとは異なる分布を形成している(石器ブロック2)。この分布は、調査区外の主に北東方向へ広がっていることが予想される。

本遺跡の2003～2005年度の発掘調査で出土した574点の石器の器種組成からは、玉髓を利用した石刃剥離に関連する石核と剥片類が主体を占めることと、ツール類の僅少さが指摘できる。こうした様相は、これまでに本遺跡で得られている約1,500点の採集資料や、一子沢遺跡の約400点の採集資料を見ても同様である。このことは、本遺跡を含む新川流域の玉髓原産地遺跡で製作された石刃やツール類が、積極的に遺跡外へ搬出された結果を示そう。

しかし、本遺跡で出土している石器の点数と、推定される石器分布の範囲からみて、遺跡の規模は当該期の原産地遺跡として大規模なものではない。さらに器種組成や石刃剥離の技術形態からみても、後期旧石器時代のごく短期間に営まれた可能性が高い。この背景には、新川流域における玉髓原石の散漫な埋没・分布状況が関係していると考えられる。

黒耀石原産地に形成された北海道白滝遺跡群や、サヌカイト原産地に形成された奈良県二上山遺跡群のように、大規模な石材原産地では石材が安定的・継続的に採取可能であることから、遺跡の規模も大きくなりやすく、石器製作活動が長期間にわたって営まれるケースが多い。これに対し、新川流域に産出する玉髓は大きくても直径1～2m大の原石が広範囲に点在し、石材の産出状況を異にしている。新川流域遺跡群では、こうした石材の点的分布に適応した遺跡が形成されていることが予想される。

新川流域の玉髓原石は軽石質凝灰岩層中に包含され、露出地点周辺には玉髓や珪化木の自然破砕礫が濃密に分布する。しかし、凝灰岩層の露出しない本遺跡内には、こうした自然破砕礫の分布は認められず、すべて人為的な剥離の痕跡が認められる石器である。このことは、本遺跡で利用されている玉髓が遺跡内で採取されたものではなく、近傍の原石露出地点から搬入されていたことを示している。さらに、新川流域で産出する玉髓は部位によって石質が不均質であるが、出土した石器の多くは比較的良質な玉髓で占められており、石核や剥片に原石表皮の残る割合も比較的少ない。このことは、原石採取地で不要な部分が除去され、石器製作に適した石材が選択的に搬入されていたことを示している。

また、本遺跡では断面採集により黒耀石製のナイフ形石器2点と、東歴確認調査区で黒耀石のチップ多数が得られている。今回の調査では、原石として搬入されたと考えられる黒耀石の小垂円礫1点が出土した。これらの黒耀石は肉眼観察では、遺跡から北西に約4km離れた谷山地区を流れる荒川の河床で採取されるものに類似している。これまであまり周知されてこなかった谷山地区の黒耀石も黒耀石原産地のリストに加え、蛍光X線分析等によって本遺跡から出土した黒耀石と比較検討される必要がある。

新川流域では、日本海側の珪質頁岩にあまり依存しない、在地の特定石材を利用して集中的に石刃剥離とナイフ形石器などの製作を行う原産地遺跡が形成されていた。新川流域で製作された石器は消費地へと搬出され、回帰的な遊動生活の中で珪質頁岩と近傍の在地石材とを組み合わせ合わせた計画的な石材運用がなされていた可能性がある。そうした意味で、本遺跡は石材が広範に搬出・消費される広域型の原産地遺跡とは異なる、在地石材利用の一環として形成された在地型の原産地遺跡として位置付けることが可能であろう。

今後は、今回新たに検出した石器ブロック2の完掘を目指して発掘調査を継続する予定である。また、出土した石器については母岩別分類や接合作業等を含めた石器製作技術の検討とあわせてブロック間の関係など平面分布の検討を進め、本遺跡における石器製作活動の様相を明らかにしていく。さらに、本遺跡周辺における玉髓原石の露出地点と遺跡の踏査を継続し、新川流域遺跡群における後期旧石器時代の石材利用の様相を明らかにしていきたいと考えている。

本遺跡では玉髓を利用した縄文・弥生時代の石器は出土していないが、新川流域の玉髓が後期旧石器時代以降、まったく利用されなかったわけではない。周辺での縄文・弥生時代の集落のまとまった調査例は多くないが、本遺跡の北約3kmに位置する東足立遺跡（縄文時代後期、宮城県教委1981）では日本海側から安定的に供給された珪質頁岩を主要石材としながらも、在地石材である玉髓を石鏃などの素材として積極的に利用している。

後期旧石器時代と縄文・弥生時代の新川流域における石材利用のあり方を動態的に捉え、その変遷などについて通時的に比較検討していくことも、今後の課題である。

## 参考・引用文献（年代順）

- 板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫 1981「仙台およびその周辺に分布する愛島軽石層」『東北地理』37
- 宮城県教育委員会 1981「東足立遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』「宮城県文化財調査報告書」81
- 市川米太 1986「青葉山遺跡B地点のTL年代」『東北大学埋蔵文化財調査年報』2
- 興水達司 1986「愛島軽石のFT年代」『東北大学埋蔵文化財調査年報』2
- 佐藤高晴 1986「青葉山遺跡B地点の火山灰のESR年代」『東北大学埋蔵文化財調査年報』2
- 田村俊和 1986「谷山県自然環境保全地域の地形・地質」『谷山県自然環境保全地域学術調査報告』谷山県自然環境保全地域学術調査委員会
- 相原淳一 1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年—仙台湾周辺に分層発掘資料を中心に—」『考古学雑誌』76-1
- 東北歴史資料館 1994「事業報告」『東北歴史資料館年報』平成5年度
- 佐川正敏・大場正善 2003「賀籠沢遺跡2003年度発掘調査の成果」『第17回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』
- 大場正善 2004「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について—東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の玉髓原産地遺跡からの予察—」『宮城考古学』6
- 佐川ゼミナール 2004「賀籠沢遺跡2004年度発掘調査の成果」『第18回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』